

**GSID**

**Discussion Paper No.213**

『旅』は誘う  
——観光雑誌と編集者・執筆者・読者の「北海道」と「アイヌ」

東村岳史

**June 2019**

**Graduate School  
of  
International Development**

NAGOYA UNIVERSITY  
NAGOYA 464-8601, JAPAN

〒464-8601 名古屋市千種区不老町  
名古屋大学大学院国際開発研究科

# 『旅』は誘う——観光雑誌と編集者・執筆者・読者の「北海道」と「アイヌ」

東村岳史

## 1. はじめに

本稿では、日本の代表的な観光雑誌『旅』に掲載された北海道関連記事（その中にアイヌを含む）を取り上げ、紙面に現れる空間認識や他者認識を考えてみたい。

旅は人を行動へといざなう魅惑的な言葉である。移動先で遭遇する人々や自然、事物に対する新鮮な感動は旅行者をリフレッシュさせ、日常の生活を送るに際しても活力を与えるものとなる。文字通りの空間移動のみならず、移動を伴わない日常生活を含めた人生そのものが旅というメタファーで表現されることもある<sup>1</sup>（Kaplan 1996=2003）。あるいは、他人の旅行記を読むことによって擬似旅行体験をしている気分を味わうこともできる。では、実際の旅行体験であれ擬似旅行体験であれ、旅にまつわる言説はどのように編成され、どのような像を結ぶのであろうか。異民族が住む日本の「辺境」という地政学上の位置ゆえ、北海道には本州以南の地域にはない異質性が付与されてきたことはたしかである。

拙著（東村 2006）の中の1章「観光という磁場の力学」で、私は観光という領域において立ち現れるアイヌ民族と和人の関係について論じたが、観光の場面であらわになることは非観光的場面で見られる現象と本質的には変わらない、というある種身も蓋もない結論を導いた。この場合は、見られる側であるホストと見る側であるゲストが実際に遭遇する状況と構造が議論の対象である。それを踏まえた上で、ここではメディア表象に傾注した分析を行ないたい。雑誌の紙面はどのように構成され、どのように編集者・書き手と読み手が交錯するのが主要な論点となる。以下、次節では観光雑誌を読み解く枠組みを提示し、3節以降で『旅』の創刊から1970年まで（この年を区切りとする理由は後述する）の間の北海道関係の記事を分析し、まなざしと紙面の変化をあとづけていく。

なお、先行研究について簡単に言及しておくとして、『旅』の紙面全体を通時的に分析したものとして、森正人『昭和旅行誌——雑誌『旅』を読む』（森 2010）がある。『旅』の全体像を概観するには簡便で参考になるが、北海道やアイヌの表象についてはふれられていない。またアイヌ表象に関連するものとしては、崔銀姫『表象の政治学——テレビドキュメンタリーにおける「アイヌ」へのまなざし』（崔 2017）があげられる。崔の

研究は、副題にもあるように、戦後のテレビドキュメンタリーにおけるアイヌ表象を包括的に分析したもので、その一部は1950年代に制作された「観光アイヌ」を扱った番組である。崔は「アイヌ」に向けられたまなざしとして三つの位相の構造的な移行を抽出している。崔が論じているまなざしの変遷については、結論で参照する。

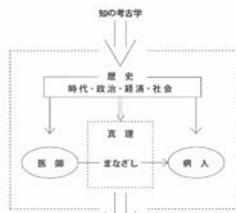
## 2. 観光雑誌を編集するまなざし

本稿で私が『旅』を読み解く構えとして出発点に据えるのは、前著でも引用したアーリの『観光のまなざし』である。アーリは、フーコーの「まなざし」論を参照しつつ、何が観光対象としてまなざされ、どのように変容していくのかを歴史社会的に解析した。ただし、アーリの「まなざし」概念については批判もあり、その論者の一人である安村克己の論考を見ておきたい。まずは、安村も言及しているアーリの一節を引こう。

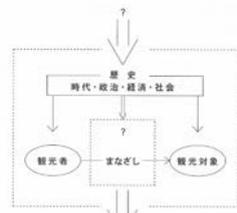
このまなざしは社会的に構造化され、組織化されているので、ちょうどこの医学のまなざしと同じなのである。もちろん、これは「制度によって支えられ正当化された」専門家に限られたまなざしではないという点では、次元が異なるとは言える。とは言っても「必然性のない」遊興の生産においても、実際はツーリストとしてのまなざしを構成し発展させることを後押しする多くの職業専門家がいるのである。(Urry 1990 = 1995: 2) <sup>2</sup>

安村は、「観光のまなざしの概念は、観光専門家の知のまなざしに限定しなければ、医学的知のまなざしと同次元には取り扱えない」（安村 2004: 12）という。なぜなら、フーコーの仕事の中で「まなざしがとくに考察に深くかかわるのは「真理」の問題群においてであり」（安村 2004: 16）、医者が真理の名の下に専門知をかかげて患者をまなざす態度が特徴的なものだからである。そこで彼は、アーリが十分に展開しなかった「観光のまなざし構造の再構築」として、「マス・ツーリズムに代わるサステイナブル・ツーリズムの生成」にかかわる「観光専門家のまなざし」図式を措定する（安村 2004: 19-20）。ツーリズム一般に当てはまるものではなく限定的な用法になるかもしれないが、これならばフーコーが用いた「まなざし」と同型的であるという。サステイナブル・ツーリズムであれば、かくあるべきという「専門家の“知的＝専門的”なまなざし」

は適応可能だが、マス・ツーリズムではそうではないためである。マス・ツーリズムにおいては、対象（医学の場合は病人）をまなざす主体は観光者（安村 2004: 15 の図表 2）であり、医師のような専門家ではないからである。



図表1 フーコーの医学的まなざしの構造とその考察



図表2 アーリの観光のまなざしの構造とその考察



図表3 サステイナブル・ツーリズムのまなざしの誕生

（出典 安村 2004: 14-5、20）

安村が指摘するように、アーリの「まなざし」論は十分に展開されているとはいいがたいし、フーコーと「次元が異なる」点がある構造を「同じ」ように議論できるかどうか、疑問の余地はあろう。ならば、安村が修正図式を提示したように、フーコーと同型性を意識して限定適応するという方法も一案かと思う。

ただ、私はアーリの「まなざし」論にはまだ別の活用の余地があり、安村の限定適応路線にはかえってまずいところもあるのではないかという気がする。安村も図表 2 で示しているように、マス・ツーリズムにおいてまなざす主体の位置に来るのは通常観光者である。しかし、アーリの一節をもう一度見ると、彼はマス・ツーリズムにおいても「職業専門家がいます」といっている。これは、本章のように観光雑誌を読み解く際に示唆的である。観光雑誌の編集者（部・元）こそ、「観光のまなざし」の職業専門家として見なせるのではないか。後述するように、『旅』という雑誌がある種“正しい旅行のあり方”を啓蒙するような性格を持っていたことを考えれば、なおさら適合的であると思う<sup>3</sup>。また、前著でも引用した箇所だが、アーリの議論の骨子の一部として、「世界のほとんどあらゆる所が観光のまなざしの対象として成立しうる」（Urry 1990 = 1995: 72）とあるように、場所のみならずあらゆるものが観光の対象としてまなざされるかあるいは動員され、観光に事寄せて語られることもあげられると思う（文化財、みやげ、食事、開発など）。「観光のまなざし」が対象を“飲み込んで”いくのである。

また、安村は修正図式（図表 3）の中でまなざしの主体を「観光専門家」に限定しているが、私はここに一般の「観光者」を含め、「サステイ

ナブル・ツーリズム」という限定をはずした図式を提唱したい。観光雑誌の編集の主導権を握っているのは専門家なので、専門家に限定することがまちがっているわけではないが、後述するように、『旅』の紙面においては専門家ではない寄稿者が専門家のコントロールをはみ出す形で読者に影響を与えているのではないかと思われる内容もあるし、『旅』の紙面は「サステイナブル・ツーリズム」に特化していないからである。その上で補足すると、周藤が述べるように、観光はフーコーが論じたようなパノプティコン的なまなざしが機能する領域ではなく<sup>4</sup>、その点では「まなざし」の性質が異なることには留意しておかなければならない(周藤はそれを「ツーリストのまなざし」ではなく「ツーリズムのまなざし」と総称している)(周藤 2018: 8-9)。したがって、修正図式にはさらなる修正の余地があるだろう。

なお、フーコー研究者の議論を援用してつけくわえたいことが2点ある。一つは、「まなざし」の正当性(檜垣 2010: 51)であり、“かく見るべし”という知が正当性をもって主張される様態を見ていきたい。もう一つは、まなざしの変化であり、フーコーにおいては、「死の側から生をみる」という視点の逆転である(檜垣 2010: 53)。「観光のまなざし」においてはフーコーが論じた医学の領域ほどドラスティックな視点の転換は起こらないものの<sup>5</sup>、まなざしの変化という主題はアーリの著作全体でも追究されていことである。

さらに、記事が読者にどのように働きかける内容・語り口になっているかに着目する際、本稿では、地理学の視点から『旅』を解読した滝波章弘の「ポリティックな作用」・「ポエティックな作用」(「ポリティックとは広い意味で政治的・社会的なこと、ポエティックとは広い意味で詩的・美的なこと」という用語を借用する(滝波 2005: 11)<sup>6</sup>。滝波が説明しているように、ある対象を郷愁をもってながめたとして、個人的心情にとどまるかぎりにはポエティックな作用にとどまる。しかし、郷愁を語る言葉が保存運動に結びつくような事態を引き起こせば、それはポリティックな作用として考えるべきであろう(滝波 2005: 13)。これも後述するように、『旅』の紙面に現れた文章には、書いている当人はポエティックな作用のみのつもりでも無意識的にポリティックな影響を受けていたり、あるいはポリティックな作用を含みこんでいたりするものが見受けられる。そこで、ある文章がどのようにポエティック／ポリティックな作用を発揮するのかを読み解く際の一つの構えとしたい(滝波も述べているように、両者は並存することが多い)。

そして、もう 1 点つけくわえると、私自身が読者として『旅』を読んだ際、その記事によって旅に誘われるかどうかである。観光雑誌なのだから、読者を旅に誘い出すような目的で編集されていると考えるのが自然だろう。しかし、ある種の“正しい旅行のあり方”を啓蒙する性格を持った雑誌であればこそ、読者を素直な気分で旅に誘うものとは思えないような記事が、「アイヌ」に関するものには登場する。そのような記事をどう評価すべきかは後段で論じていくことになるだろう。

本稿の限界についてあらかじめ述べておくと、『旅』という雑誌の性格上、純粹に政治的な話題は扱いにくく、いかにも商業主義的な表象に彩られるのは否めない。その意味では、これまでのアイヌ表象に関する先行研究で指摘されてきたことと比べて、特に意外な知見はない。ただ、戦後の一時期、読者の不穏な感情をかき立てるような記事が登場する。そのような記事が生み出された意味とその「まなざし」の特徴を考察したい。

### 3. 『旅』の紙面に現れた「北海道」と「アイヌ」

#### 3.1 『旅』の概要

『旅』は 1924 年日本旅行文化協会の機関誌として創刊され、1934 年には版元をジャパン・ツーリスト・ビューロー (JTB) に移している。その後大戦の影響で 1943 年 8 月をもって一時終刊となったが、1946 年 11 月に復刊、以後 2003 年に休刊するまで JTB から発行された (2004 年以降は新潮社に譲渡、2012 年休刊)。本稿で扱う期間を『旅』自身の特集記事を用いてごくおおざっぱにまとめておくと、大正時代の「山水ブーム」に始まって「趣味の旅」として大衆にも観光旅行がレジャーとして普及していくのが戦前期、敗戦後「食べることが第一の飢餓時代」をくぐりぬけ、やがて「旅行もインスタント化」と評されるほどの全国的旅行ブームが沸き起こるのが戦後期、というところになるろう (澤寿次「旅行 100 年史」8-12 (41 卷 8-12 号 [1967])、以下『旅』の巻号・発行年については同様に記す) (森 2010)。

実用ガイドというよりは紀行文を中心とした読み物としての性格が強いことは戦前戦後を通して共通していることである (次第に実用ガイド的性格が強くなっていくことは後述)。巻末の寄稿者紹介には研究者や文学者の顔ぶれが多数ならび、ある種啓蒙的な“望ましい観光のあり方”を述べる文も散見される。また取り上げる地域も有名観光地のみならず、人があまり訪れないような観光地らしくない所も紹介されており、全体

としてはそれほどセンセーショナルな印象を受けるものではなく、旅情をうたったものも多い。

読者については、断片的ながら以下のような情報がある。日本交通公社（1962：175）には、1935年の年間発行部数は24万部（1号あたり2万部）と記されているが、白幡（1996：91）は「当時としてはきわめて多い」としている。戦後では、1956年には4万4千部を記録、1961年には10万部を突破し、「旅行専門紙としての地位を築くに至った」と自己評価されている。これはアンケート調査により「読者の中核体はハイティーンから30才前後の若い層であることが判明した。そこで従来の随筆的な性格を一変して、旅行の実用記事に重点を置き、季節に適した特集を試み、あるいは推理小説を掲載するなど、青年層向きの編集に心がけた結果」だとしている（日本交通公社 1962：378）。

全国誌であるから読者の居住は日本国内全体に及ぼうが、主として東京周辺を基準として想定されているものとみなしてよからう<sup>7</sup>。というのも、北海道訪問の紀行文などは東京を出発して青森から函館にわたり、といった経路で書かれているものが多いからである。その点ではこの紙面に表れる「北海道」は基本的には道外在住者の像といえようが、全く外から一方的に投げ付けられたものともいえない。執筆者の中には北海道出身者や在住者もしばしば起用されているからである。道内と道外の認識に差が見られるかどうかについては、以下の分析の中でふれていく。

### 3.2 北海道関係記事の概要——イメージと傾向

手はじめに『旅』が創刊された1920年代ごろ、観光地としての北海道周辺がどのように認識されていたのかをつかんでおきたい。

4巻6-8号[1927]にかけて、紙面には「一、これまでに行かれた夏の旅行地の何処が最もお気に入りましたか？ 二、これからお出になりたいと思ばれる夏の旅行地は？」という問い合わせを「各知名人士」に行なった回答結果が紹介されている。全部で147人の回答者中36人が二つの質問のどちらかで「北海道」か「樺太」に言及している（両方で言及しているのは3人）。北海道旅行がまだ身近なものではなかった時期としては、約4分の1の人間が関心を示していることはかなりの高率といってさしつかえないだろう。

最初の設問への回答で北海道・樺太に言及したのが12人、次の質問への答えで言及したのが27人というのは、この時期においては比較的旅行する機会が多かったと思われる「知名人士」の間でも、実際に訪れたこ

とのある人物はまだそう多くはなかったことを示している。それにもかかわらず、北海道や樺太を特に夏に訪れたいという希望者が多いのは、1920年代ですでにこの地域に関して旅行意欲を喚起するようなイメージ形成がなされていたことを意味するだろう。また二つ目の設問への回答で特に顕著だが、特定の場所というよりは地域全体を指し示している傾向が強い。27人中かなり漠然としたものも含めて固有名詞をあげているものは7人にすぎない。他の20人は「北海道廻り」とか「樺太あたり」と地域全体を訪れたい旅行地としてあげている。またさらに、その中で9人は北海道と樺太を併記している。

以上からさしあたり次のようなことがいえそうだ。この時期北海道や樺太を実際に訪れる人はまだそう多くなかったとはいえ、少なくとも「知名人士」の間ではこの地域は夏に訪れる場所としてはそれなりに魅力的な観光地として映っていたこと、ただし、それは具体的な個々の観光スポットの知識に裏付けられたものというよりは、北海道と樺太をひとくくりにして全体として漠然とイメージされる傾向があった、ということである。

続いて記事の傾向について述べていく。戦前期は、創刊号の「北の旅(1)」1巻1号[1924]から1943年まで毎年北海道に関係する記事が掲載されている。量的には、1930年以降に増加傾向が見られ、北海道特集が組まれる14巻7号[1937]から15巻6号[1938]あたりが戦前期におけるピークであろう。取り上げられる地域としては、1934年に国立公園に指定され売り出し中であつた阿寒や大雪、すでに温泉地として有名であつた登別などがくり返し登場する。ただし無名地もかなりあるので有名地指向のみとはいえない。また執筆者は限定されるとはいえ、一般観光客向けとはいえない千島や樺太紀行がしばしば掲載されるのは、当時の日本の「辺境」への着目を促したものと考えられる。

その後戦時中の休刊期を経て、戦争中の惨禍から復興し北海道旅行が物理的に容易になるのにはしばらく時間を要したようであるが、「観光地北海道」のイメージ復興はそれよりもずっと早かつた。「北海道の風光阿寒と大雪」21巻5号[1947]で編集部は「諸名士に忘れ難い旅行地を尋ねた」ところ「その大部分の方は、北海道にゆきたしと、雄大で神秘的な北海道の風光を讃えた」と記している。それゆえ「愛読者の方々も、北海道の風光に接したいと考へられる方も多いと信じ」阿寒と大雪の写真を掲載したのだそうである(37頁)。このように「名士」の北海道に対する関心は戦争を経ても途切れることなく保たれ、それを参考にした編

集サイドが一般読者へも北海道への関心を喚起していくという紙面構成の流れを読み取ることができる。

戦後において特徴的なのは、まず記事の量が増えることである。これは『旅』自体のページ数の増加によるものもあるが、1冊がほぼ丸ごと「北海道特集」として組まれるような紙面構成は戦前期には見られなかった<sup>8</sup>。1970年までの8回の「北海道特集」は23巻6号[1949]・29巻6号[1955]・33巻7号[1959]・36巻7号[1962]・39巻7号[1965]・41巻7号[1967]・42巻9号[1968]・44巻7号[1970]で、戦前と同じく夏が観光シーズンとしてとらえられていることがわかる（冬にはじめて特集が組まれたのは1972年札幌オリンピック時）。また後述するが、取り上げられる地域も広範になり、何より「地の果て」が関心を集めるようになる。

### 3.3 北海道らしさを構成する要素

#### 3.3.1 戦前期

##### 3.3.1.1 「自然」と「文化」、「アイヌ」

『旅』創刊当時の旅行熱の源は、一言でいえば都会人の「自然への回帰」であった。創刊号巻頭「日本旅行文化協会創立に際して」1巻1号[1924]で野村龍太郎は、「近代文明の真中に生存する吾々の日常生活は梢々と（ママ）もすると吾々を自然から引離さんとする」が「自然に還ることは旅行によつて然かく容易に得られる」（3頁）としている。この場合求められている「自然」は「文明」とは対照的な、できるだけ人為の加わっていないものという意味合いが強く、おそらく英語でいうwildernessに近い。したがって日本の中では北海道がその格好の対象地になる。たとえば函館本線沿いの著名な観光地であった大沼を訪れたある旅行者は、「私が北海道に求めたいのは、もつと原始的な肌触りの硬々した何ものか」であるといい（喜多村進「北の旅（1）」1巻1号[1924]:34）、別の“らしい”場所では「私はさういふ広い雄大な、緑野を望まうために真駒内に来たのである」（「北の旅（2）」1巻2号[1924]:27）、「取りわけすばらしく思つたのは、石狩十勝の国境」で「列車内の誰もが叫ばずにはゐられない程の雄大な豪放な高原」（「北の旅（3）」1巻3号[1924]:8）と満足するのである。

自然景観を描写する際に頻出する形容詞は「原始」「雄大」などで、「日本ばなれ」した風景や「エキゾチック」さへの賛辞である。その場合の憧れの対象は「山水」的なやはり“人間臭くない”自然である。ある旅

行者は「雲仙の緑野」に「人間悪の跳梁」を見たといい、「それにくらべればここ（月寒種羊場：引用者注）はいい。平和そのものの姿だ！」とほっとし、支笏湖を訪れて「ここはまだ『人』に荒されてゐない。況んや八景投票（注(11)参照：引用者注）とは言ふものの渦中に捲きこまれる事はなかつた」としている（「北海道脚にまかせて」4巻9号[1927]：95, 99）。

ただ、自然景観の素晴らしさが強調されるのが主潮な中で、それとは対比的に「文化」的な要素がコントラストをなして現れることもある。紙面に登場する例としては数は少ないが、「文化は東北地方を通過して北海道に飛んだといふ人の噂を如実に首肯させるものがある」（「北海道の横顔（1）」7巻8号[1930]：12）、「文化が東京から仙台を越して北海道へとんでゐることがはつきりうなずけた」<sup>9</sup>（「屈斜路湖畔から美幌へ国境を越えて」7巻9号[1930]：92）という記述からは、東京在往者の間にある「噂」が実感をともなう確認されるさまがうかがえる。

東北との比較優位が強調されているのは、距離的な遠隔感を克服するためであろう。つまり東京を出発して東北を飛び越え、「文明」の地である函館や札幌を起点に「自然」を見て回る、といった旅程イメージを想起させるのである。典型例をあげれば、「北海道の都市から、この旧土人部落へ、自動車を飛ばす」（「アイヌ地視察覚え書」7巻7号[1930]：135）という表現である。東京から青森まででもかなり遠い。しかし本当の「遠さ」は北海道を実際に旅する間に味わってほしい、というのが暗黙のメッセージであろう。

「文化」を強調するもう一つの手段は「アイヌ」との対比であり、その醜悪な例が8巻6-7号[1931]に掲載されたイラストである。8巻6号では「想像の北海道」として「アイヌ」の狩猟図を、「実際の北海道」として「おしゃれなカップルが散歩するモダンな町並み」と対比させている（25頁）<sup>10</sup>。また8巻7号では「北海道札幌所見」として「熊を縄引いているアイヌ」が「ビルと車」という「文化」を背景に描かれている（76頁）（なお、「アイヌ」に関する記事はあらためて検討する）。

### 3.3.1.2 「理系」記述に混在する「人文」要素

以上述べてきたような要素は前半の10年でほぼ出揃い、15巻6号[1938]の「北海道特集」で集約して提示される観がある。「特集グラフ 北海道瞥見」では鉄道省旅客課撮影の写真が「観光北海道」「原始境北海道」「宝庫北海道」に分けて紹介され、「札幌」＝「文化都市」「観光都市」、

「定山溪」＝「札幌から程近い」「夫だ原始林に蔽はれ」た温泉地、「アイヌの酋長さん」、「羊群声なく悠遊する大陸的情景は遠く異境にあるを覚ゆ」といった文言が散りばめられる。

この特集号の執筆者たちは「北海道」をことさらに“それらしく”描いているわけではない。「北海道の初夏」の舘脇操は北大の植物学者、「阿寒の温泉」の小坂北兎は厚生省内国立公園協会勤務者、「北海道の動物」の犬飼哲夫は北大の動物学者といった具合に、いわば「理系」研究者の紀行文である<sup>11</sup>。ただそこに紛れ込む「人文」的記述は決して上で述べてきたような「北海道」像喚起要素と異なるものでもない。「老爺の白髭に興亡の民族史を物語的に思へば、胸にわたり来るかの花のかをり又くむべきものがあらう」（舘脇, 70-71 頁）、「皆さん。今日北海道の各地の開けてあるのには驚く。…さて其の北海道にも都の味ひを遠く離れた原始味豊かな秘境がまだまだ広く残されてあるのである」（小坂, 73 頁）、「アイヌ族のユーカラ、オイナその他の伝説民謡には熊が出なくては真に淋しいものである」（犬飼, 75 頁）といったように、「理系」のしかも地元研究者にまで及んでいる「人文的潤ひ」の影響を典型的に見ることができる。

### 3.3.1.3 「アイヌ」の表象

戦前期のアイヌ関係記事の量は、時期的には 1931-2 年にかけてと 38 年あたりが多い。記事の見出しや内容から、「視察」・「伝説」・「風景」の三つのキーワードを抽出してみたい。

前述のイラスト例からも容易に推測されるように、戦前期における「アイヌ」の扱われ方は和人が見下す視線で書かれているものが少なくない。代表的なものとして、宮原晃一郎「有珠のアイヌ部落」2 巻 2 号 [1925] や小熊秀雄「アイヌ地視察覚え書」7 巻 7 号 [1930] など<sup>12</sup>、特に初期のものには書き手が実際にアイヌを見た感想を差別感あらわに描写している記事が目立つ。紙面には「亡びゆく」という形容も連発される。

ただし、北海道関係記事が増加する 1930 年代以降においては「アイヌ」の占める比重は相対的に低下する。初期においては北海道への注目度を高めるために代表選手的に、「視察」の上なまなましく描写された「アイヌ」が、やがて「北海道」を構成する要素の一部に後景化され、「風景」「伝説」としてなまなましさを「漂白」した形で提示される傾向が見られるのである。いわば「アイヌ」の「山水」化であり、こうなった場合の「アイヌ」は旅行者が見て通りすぎるだけの対象でしかなくなる。そ

れは「亡びゆくアイヌ」が「北海道風景」として写真紹介され（8巻6号[1931]: グラビア）、「自然風景のうちに更に人文的潤ひを附与するものはアイヌの生活である」（「北海道国立公園候補地の概略」9巻10号[1932]: 101）と位置付けられ、あるいは「旧土人部落の特異な風景等々絵になる景」（「北海道の印象」16巻9号[1939]: グラビア）として言説や写真で表現されていくようになる過程である。「われ等の生活環境から自然の姿が一つ一つ消されて行くとき、原始林や鈴蘭の匂ひ、熊の匂ひなどは大きな誘惑である。その外旅興をそそるものに、アイヌの昨日と明日があり、蝦夷地開拓の歴史がある」と表現されるに至っては（「北海道の横顔（2）」7巻9号[1930]: 9）、さまざまな要素と「アイヌ」が観光資源として並列的に記述されているのが確認できる。

次に戦前期の三つのキーワードに共通する点と相違点を考えてみよう。「伝説」と「風景」は、アイヌ自身を目の前にする「視察」と比べると静態的である。「伝説」は時間的に、「風景」は空間的に対象を自分から遠ざけ、安全な立場から眺めることを可能にする。つまりこの場合の「アイヌ」ははっきりと無害化されているといえる。その上で「伝説」の味わいを解説するという代弁者の役割は書き手のものになる。白仁草三「アイヌ族挽歌」4巻10号[1929]: 29-30では、有名な知里幸恵の『アイヌ神謡集』の序文を改変しつつ、かつて「自然の寵児」であったアイヌが「文明開化の先鋭な鎌」のために追いやられていったと述べた後で、「美しい原始的な言葉、伝説、歌謡などを…想ひ出し、唄つて彼等の先祖を祝福してやるのも強ち無駄なことではあるまい」と正当化して、さらに『アイヌ神謡集』を長々と引用する。

「伝説」と「風景」が対象の形態を指し示す言葉であるのに対し「視察」は見る側の目的を指し示す言葉である。つまり、「娯楽」ではなく「視察」であると目的を正当化する必要があればこそ用いられるのである。その前提となるのは、この時代においてもすでに娯楽目的でアイヌを見物するような態度が非難されていたことがあげられる。そのような態度は見物にはいかない「良心的」な和人からも、また見物される当のアイヌ自身からも反発を招くおそれがある。そのような批判や反発を回避するために、「視察」という言葉により目的を正当化し、そして具体的に「心得」が書かれる必要があったのである。

「アイヌ地視察覚え書」7巻7号[1930]: 134-139で小熊秀雄は、「旧土人部落」への「視察」という体裁でいわれているものは実際は「見物」とであると指摘し、「見せ物」を批判しているのはアイヌよりはむしろアイ

ヌコタン周辺に住む和人の方であるという。ただし、アイヌをだましたり見せ物視したりしないような「視察」自体は断念する必要はないともいい、訪問にあたっての心得をこう説く。「優越感をもつこと」は禁物で、「全く感興のない死物の踊り」や「儀式」を見るために「金銭に依って踊らせるやうなことはしないこと」であり、「諸君はなるべく『興行師のやうなアイヌ人』に接近しないことだ」と注意する。そしてそれとは対照的に「親密な、理解の態度をもって、素朴純情なアイヌを選ぶべき」であり、そうすれば彼らは「忽ちにして諸君を理解するだらう」から「泌々と滅びゆく自分達の不遇を語り、…意外に数多く様々な収穫があるであらう」というのが“お勧め”である。

“がめつい”「アイヌ」はあくまでも回避（排除）され、“純情な”（都合の良い）「アイヌ」が「滅びゆく」の枠内で歓迎されている。見る側を脅かすような事態を回避するための方法は、目的としてはまず「研究」、態度としては「優越感」を抱かないこと「親密な、理解の態度をもつ」ことであり、また対象としては「興行師のやうなアイヌ」を避け、「素朴純情なアイヌを選ぶ」ことである。このような「心得」を念頭において行動すれば、見る側の安全と平和は保たれるというわけである。これをそのような「心得」もないままにアイヌを訪れた紀行文と比べると、その「効果」は明白である。

「有珠のアイヌ部落」2巻2号[1925]：10-16の著者である宮原晃一郎は、著名なアイヌ教育者であったバチューラーの依頼で有珠の「視察」に赴くのだが、日暮れに到着して駅に出迎えているはずのアイヌが見当たらず、疲れと苛立ちもあって当のアイヌの櫓を見つけたとたん、「何だつて、黙ってこんなところにいるんだ。俺は宮原だ。さつさと乗せて行け」とどなりつける。櫓には途中から中年のアイヌ女性も同乗してくるが、彼が話しかけても返事をしない女性は日本語がわからないのかと思い、「噫！黒いお客と一緒に 私は此薄暗の世界を、木一本すらない此盆地を何処へ行くのだ！」と不安にかられる。ちょうどその時バチューラーの姿を認め、彼は有珠に到着したことを知る。宮原は有珠に一週間滞在するうちに事情に慣れ通じ、コタンの情景を「涙を誘うやうな陰惨な何物かが潜んでゐた」と描写し、「亡び行く民族の運命といふものを考」えるようになる。最初の出会いにおける彼の高圧的な態度は当時の和人のアイヌに対する態度一般に通じるものもあろうが、それだけではなく、見知らぬ他者への不安に根ざしていることがうかがわれる。しかしやがてそれは「亡び行く民族」というできあいの「理解」に落ち着く。宮原

の場合はおそらくあまり自覚せずに行なわれていた不安の「飼い貫らし」を、小熊の場合は前もって意識的に行なうことを勧めているのである。

小熊の「視察ノススメ」型は、「伝説」の鑑賞型とも共通する点がある。「伝説」型の白仁では『アイヌ神謡集』を消費・代弁することによって「自然の寵児」たる「高貴な野蛮人」モデルを作り上げているが、小熊においても“態度の悪いアイヌ”を排除し、“話の分かるアイヌ”のみを求めているという点では同じなのである。宮原において垣間見られた他者から脅かされる可能性を排除しているという意味では、結局どのタイプの「アイヌ」観光（「視察」）にも通底するものが存在しているといえる。そして「視察」を目的とした記事が登場しない 1931 年以降に関しては、前述のように「風景」や「伝説」として他の北海道表象要素の中に取り込まれて無害化される傾向がうかがえる。つまり、「視察」のようなポリテックな作用が強い記述からポエティックな作用の強いものへと変化していくのである。

### 3.3.2 戦後期

#### 3.3.2.1 特集から

当該期に『旅』の編集長として活躍したのが戸塚文子と岡田喜秋である。戸塚は 1948 年から、岡田は戸塚の後を継いで 1959 年から 71 年まで編集長を務めた。北海道関係の記事に関しては、特集号における編集後記に、彼らの自負と意気込みを読み取ることができる<sup>13</sup>。

29 巻 6 号 [1952]: 124 「北海道は私にとっても、まだまだ未知の世界を秘めたアコガレの地なのである。本州以南に生れた人たちは、無理をしても一生に一度は、訪れておきたい土地である。あの雄大で特異な風土が、新しい人生の巾を広げてくれるからだ。…去年の国民体育体大会の開催や天皇行幸で、内地の北海道熱が急にあがって、読者の方々も久しくこの特集号を要望しておられたので、ここに編集部懸案の『北海道号』をお送りするわけである。…道内の方々の御意見も充分うかがって万遺憾のないように作りあげたつもりである。ねがわくは『旅』別冊的存在として、末永く保存されることをねがっている」。

33 巻 7 号 [1959]: 144 「各氏にお願いした原稿は通り一遍の内容にしたくない気持ちからとくに観察眼の深い方々をえらんでみた。この特集号は北海道の生活を研究しようとする方のためにも役立つことを信じている」。

36 巻 7 号 [1962]: 212 「『旅行者の身になってつくった北海道ガイド』

は編集部が現地出張して、生々しいデータをもとにまとめた記事として、本誌ならでは、のものと自負しています。… 観点のしっかりした執筆者をえらんでお願いし… この一冊は今年にかぎらず、北海道旅行のバイブルとなりましょう」。

39 卷 7 号 [1965] : 266 「北海道というと、異国的な風景にあこがれる方が多いのですが、すでに戦後二十年目の今日ではただ周遊券を手にして忙しく回るといふ旅行態度は、卒業したいという方も多いようです。… アイヌにしても、もの珍しい気持で接する時代は終るべきで、三浦綾子氏にとくにお願いして、アイヌの娘の気持を同性の立場から書いて頂いたわけですから」(三浦の一文については後述)。

ややくどくなかったが、これらの後記からうかがえるのは、「観察眼の深い」執筆者陣で構成された紙面は、通り一遍の「もの珍しい」事物ではなく「生活」を見るのにも役立つものになっているという自信である。

戦後たびたびくりかえされた北海道特集号を通して、ゆるやかな転換が 1950 年代後半から 1960 年代にかけて起きていると私は考える。前述した「実用記事に重点」という点では 1955 年の特集号における附録の「北海道旅行案内」がそのような内容になっており、その後特集を追うごとにガイドブック的な記述は増えるが、ここで述べておきたいのは「まなざし」に関する変化である。1959 年の特集は「観察眼の深い方々」によって構成されていると編集部は自負している。さらに 1965 年の特集号の座談会「北海道の素顔はこれだ！ 雄大な風景ばかりに感激する時代はもう終わった！ もっと生活の底にある実情を知ろう」は象徴的なタイトルである。要約していうと、「より深く見よ」という読者に対する提唱である。それなりにブームも定着した後で、浅く狭く見るだけでは物足りない読者もいるであろうことも踏まえて、“ディープな旅”を勧めている。これは前節で述べた「観光のまなざし」の変化に当たる。最初は書き手に求められていた「深い観察眼」が読み手（潜在的旅行者）にも求められていく。この展開はそれほどドラマティックなものとはいえないし強力な拘束力を持ったメッセージとはいえない（浅く狭くの観光客は依然として並存する）ものの、それでもある種の“正しい観光”のあり方が「職業専門家」によって説かれているという点では、構造的まなざしであり知である。

### 3.3.2.2 「地の果て」への収斂

戦後期においても北海道への関心は自然景観が主流であることに相違はない。たとえば 34 卷 [1960] では周遊券発売 5 周年を記念して読者に

よる周遊地人気投票が行なわれたが、阿寒は全国の他の観光地を大きく引き離して1位を占めた。また40巻11号[1966]に掲載された「あこがれている旅先」「行ってみてよかった旅先」を基準に3位まで記入という形式で募集した「新日本旅行地百選」では、摩周湖と知床半島がそれぞれ1位と2位を占めた（このときは阿寒湖は6位）。34巻10号では「なぜ阿寒にあこがれたか？」をきいているが、「“北海道”と名前を聞いただけで私達本州の人々は、雄大な光景と共に、私達の胸に何かキゾチックな感情を与えて呉れます。中でも、とくに阿寒国立公園といえど…野性的自然にあこがれているのです」、「これだけスケールの大きい大陸的な変化に富んだ美しい自然」(37頁)といった文言が並ぶ。“まだ見ぬ美しい自然”がステレオタイプとなって流通しているのは明らかである。

しかし同時に阿寒ももはや「俗化」してしまったと感じる旅行者は新たな対象を求めはじめる。一つは後述する「生活」への着目であり、もう一つは「秘境」である。

戦後5回目の北海道特集号となる39巻7号[1965]で象徴的なのは「地の果てへのガイド」と名付けられたページで、ここで取り上げられているのは「知床」「納沙布・尾岱沼」「宗谷・利札(利尻・礼文：引用者注)」「襟裳」「恵山・奥尻」「積丹」である。それ以前にも『旅』の紙面でくり返し扱われてきた「秘境」的地域であり、観光ブームが北海道全滅に広がってきたのに及んで「地の果て」として取りまとめられたものといえる。この中には恵山・奥尻のように現在でもあまり有名な観光地ではない場所もあるが、知床や利尻・礼文、襟裳は『旅』が「無名時代」から取り上げ、ブームの先駆けを作ったという順序になるであろう。

たとえば知床を見てみよう。戦後はじめて知床が取り上げられるのが「納沙布半島と知床半島」24巻10号[1950]であるが、このときは江戸時代の探検家・松浦武四郎の日記を紹介したのみで、「自然風物の特異性と、天下の奇勝が、未だ広く知られてゐないのは惜しい」(83頁)と閉じられている。それが「北國の上アゴにさがったひげ」27巻6号[1953]、「国境の岬・北知床をゆく」「北知床をさぐる」29巻6号[1955]、「千島を眺めて暮す人」30巻9号[1956]、「オホーツク海から知床岬をさぐる」33巻7号[1959]、「オホーツク海に漂う十日間」34巻8号[1960]、「野獣の訪れる原始温泉」35巻6号[1961]、「北の果を行く——知床半島へ」36巻5号[1962]、「原始美の饗宴」37巻9号[1963]、「さいはての国立公園・知床の魅力」38巻9号[1964]、「知床半島／原始に生きる人と海鳥」

40 卷 11 号 [1966]、「流水かがやく知床の海」41 卷 12 号 [1967]、「知床／さいはての原始美」42 卷 8 号 [1968] などというように定番化し、また書き手のほとんどは道外者であることも特徴である。そしてもともとアイヌ語では「突端部＝岬」程度の意味だった（山田 1982：48）（ちなみにシレットコというアイヌ語地名は他にも存在する）のが「さい果て」・「地の果て」と形容されるようになる。「シレットコは今や日本の最東北端の国境となつた。戦後千島を失つてからはなにかしら、地の果ての淋しさが漂うようになつた」（「国境の岬・北知床をゆく」29 卷 6 号 [1955]）と書かれているように、「地の果て」と意味付与させるものは「向かい側」に旧日本領＝現ソ連領があるという意識であり、知床ばかりではなく納沙布岬や尾岱沼を訪れた記録でも「さい果て」という形容は登場する。戦前の千島・樺大領を失ったことがこれらの地域を「果て」にしたてあげたのである<sup>14</sup>。道外在住者から見て、依然として北海道は「遠い場所」ではあるのだが、戦前であれば彼方に“ぼんやりと”意識されていた国境がにわかに近づいてきたような認識が書き手にはある。そして、国境を「地の果て」と命名する記述はポエティックに見えながらポリティックな性格のものであり、書き手は無意識的である。

### 3.3.2.3 「道民」の登場——「生活」・「ふるさと」・「開拓」・「味」

「地の果て」が地理空間的な着眼点だとすれば、そのような「厳しい土地」に暮らす人間はどのようにまなざされているのか。戦後期において特徴的なのは、戦前期にはほとんど主題化されていなかった北海道生活者の人物像が記事の中で占める比重が増加することである。そのような記事の中で用いられる言葉としては、「風土」や「生活」に加えて「郷愁」や「開拓」などがある。「郷愁」は北海道生まれの「道産子」が自分の生い立ちを回想しているような内容のものが多く、これも戦前期にはほとんど見られなかったものである。また「開拓」についても戦前期に観光と関連して述べられたものはほとんどなく、実際の開拓がかなり進展した戦後になってむしろ主題として登場してくるのが特徴的である。記事の量としては 1951 年と 55-6 年、59-60 年、68 年あたりに該当するものが多い。

前述のように、「生活」がキーワードとして浮上してくるのは編集サイドの意図が働いている。29 卷 6 号 [1955] の北海道特集中の記事「北海道へのあこがれ」では、「戦後の旅行者はもっと知られざる北国の生活の断面に目をひらくことが望ましい」とされ（127 頁）、39 卷 7 号 [1965]

の北海道特集における座談会「北海道の素顔はこれだ！」のサブタイトルは、「雄大な風景ばかりに感激する時代は終わった！ もっと生活の底にある実状を知ろう」である。

そして“雄大な風土がそこに住んでいる人間の気質を形作る”というような記述も登場するようになる。戦前期では北海道育ちの馬（道産子）の気質を厳しい気候と関連づけた記事が1例見られるのみだが（「北海道・冬・ヴァラエティー」12巻3号[1935]）、戦後においては50年代前半から人間性と自然との連関を述べる文章が見受けられる。道外の間人は「日本人は必ず一度は北海道に遊んで、天空闊達な大自然と、若々しいピュリタニズム風な雰囲気によって、沁み沁みと己が屈折した濁れる心を反省すべきである」（多田裕計「星を売る放浪者」26巻3号[1952]:33）とまでいう。それに対し道内出身者は「われわれ北海道人の血液に新しい活力を吹きこむものは…われわれの北海道の大地そのものが地下に潜めた素朴原始的な強烈な『野性』以外にはないであろう」（八木義徳「北方の野性」28巻1号[1954]:33）と述べる。あるいは道外出身道内居住経験者も「住む人間も大まかであり、本州のようなケチさがいささかもない。…本州のようなせせこましさがなく北海道人の生活はどっしりと余裕があり、ここにも雄大な風土と逞しい自然の中に培われた一つの特異性が見出せるのだ」（北郷吉夫「詩の北海道を憶う」29巻6号[1955]:49）と呼応するのである<sup>15</sup>。つまり、道外からの訪問者が風土性に基づいた「道民」らしさを見出す視線と、北海道出身・在往経験者が自らを語る言葉とには違いがないといえる。

「開拓」は「道民」の人間性が観光領域で浮上してきた段階、すなわち「自然」に加えて人為（「自然」と「文明」が対比的にとらえられていた戦前とは違う）が着目されるに至った時点で登場してくる。「開拓（精神）」について述べられた代表例が、岡田喜秋「羊蹄山とアスパラガス」29巻6号[1955]:110-113である。羊蹄山麓の火山灰地という悪条件を克服してアスパラガスの栽培に成功した移住者について、岡田は「その積極性は本州人がしばしば持ち合わせないひとつのパイオニア的精神のあらわれであった」と見て、その根拠を「この胆振線の谷間一帯には明治初期から、伊達藩の血をひく進取の気象に富む本州人が定住を開始していた」ところに求めている。そして有島武郎の『生れ出づる悩み』に描写された「宏大な厳かな風景」と「アスパラガスに生きてきた人人の気持と共に想い合」すのである。岡田は当地の状況を明るい側面一色で賛美しているわけではない。アスパラガスの栽培に成功したとしても、3

年という生産準備期間のネックや、加工・販路拡大にともなう困難や矛盾を背景説明している。ただ、逆にそのような困難な状況を背景にすればよりいっそう「パイオニア的精神」が浮き上がって見える効果も生まれてくるのである<sup>16</sup>。

また「パイオニア的精神」を強調するもの以外に「生活」の情景として描かれるのは、北海道出身者が郷里を訪れなつかしい人々と再会するという回帰であり（時計音雨「利尻島で生れた“出船の港”の唄と私」35巻4号[1961]）、コンブを採るためソ連にだ捕される危険を覚悟で海に乗り出していく根室の漁師や、後に残された家族の労苦である（山本茂実「さいはての昆布道ノサップ街道」37巻7号[1963]）というように、“人間ドラマ”的な内容のものが多く見られるようになる。

戦後において、北海道を表象するもうひとつの特徴的な要素として浮上してくるのが「味」である。戦前期においても北海道の食材をほめる文言がまったくなかったわけではないが、関心を集めるようになるのはおおむね戦後のことである。そしてやや意外の感はあるかもしれないが、当初は必ずしも賛美一色ではなかった。「北海道の味覚はそれぞれ特有の野性的なうまさはあるが、海のものにしても山のものにしても、内地のそれと比較すれば一口に言って大味である」（佐々木朔「たべる北海道」23巻7号[1949]:38）というように、もとは「大味」の「欠点」を指摘されていた。一方で「内地では一般に大味だといはれてゐる北海道の魚の味も一度北海道を旅した人々の口から此の頃しばしば賞められることがあるから、『味覚の観光』を打ち出してもよいかもしれないと着目されはじめる（国松登「日蝕の礼文島を訪ふ」22巻7号[1948]:19）。このように、最初は否定されるにせよ肯定的なきざしが生じるにせよ、道外者の評価の方が先行していたようである。それが29巻6号の「ふるさと北海道」に見られるように、北海道出身者が食を自らの思い出に結び付けて肯定的に語るようになり、風土性とも関連してイメージされるようになる。また、どこの山の中の旅館でも変色したマグロを出されて閉口した（更科源蔵「原始の夢を抱く大言山の秘境」31巻7号[1957]:94）という批判からうかがえるように、北海道の「郷土食」に観光客が実際にふれる機会が少ないうちは注目度は低かった。逆に、土産品を含めてもっと郷土色（食）を打ち出すべきであるという気運の高まりによって、「味」の認知度も評判も高くなっていくのである<sup>17</sup>。

戦後において北海道らしさを表象する要素として新たに登場してきたものの共通点を一言でいえば、単なる視覚的刺激にとどまらない、身体

的に観光気分を充実させるような要素である。そして『旅』の紙面に関するかぎり、これらの要素について道内者と道外者の齟齬はなく、また対抗言説を意識して形成されたような緊張感は感じられない。

### 3.3.2.4 「アイヌ」へのまなざし

#### 3.3.2.4.1 道内在住“識者”たちの見解

この時期『旅』の編集者だった戸塚文子と岡田喜秋はともにエッセイを多数出版しており、二人とも『旅』の編集者だった時期に出版した本の中ではアイヌにも言及している（戸塚 1952、1953；岡田 1960）。しかし、『旅』の紙面では二人ともアイヌについて書くことはなかった。代わりに北海道在住者に寄稿を依頼している。いわばより当事者に近いと思われる人物に委ねていることになる。その中で執筆回数がもっとも多いのが更科源蔵である。

アイヌ関係の記事は1949年・55年・59年と北海道特集が組まれた年に多く、また記事数は多くはなくとも印象的なルポが登場するのはやはり北海道特集の中である。戦後においても「伝説」や「風景」として「山水」的に「アイヌ」をまなざすような視線は存続されているが、「視察」を唱えた記事は見当たらなくなる。その理由について私は推測以上のものを述べることはできないが、いずれにせよ、戦後においては「視察」が大義名分としては機能しなくなったのであろうとはいえる。ただし、「視察」という言葉を用いないにせよ、「まじめな研究」を理由に訪問を正当化するような論理は戦後にも持ち越されている。また、もう一点戦後においても通底しているのは、「高貴な野蛮人」を追い求めるような視線である。それは更科源蔵の紀行文に特徴的に現れている。戦後において『旅』の紙面を飾る代表的な書き手であった彼の記事からまず見ていくことにしよう。

「コタンの人々」23巻6号[1949]:11-13には二人の人物が登場する。熊に大怪我をさせられながらも熊狩りへの情熱を失わない「オト」は「立派な頑固さ」を失わず、彼に会うと更科は「魂を灑がれる思いがする」。もう一人の「一三郎」は「人間の言葉を全く知らないかと思うほど、話をすることの嫌いな」人であるが、観先客相手のモデル代としてせしめた金を愉快的な飲み代に使ってしまうようなユーモラスな面も持ち合わせている。更科の彼らに対する視線は好意的である。ただ、「一三郎」の紹介が「彼は布団の中で、五十年近い奥山の雪のやうによごれない一生を終っていた」で閉じられているように、過去の、もう同時代には存在しないような懐かしの人物としての描写であり、「高貴な野蛮人」タイプの

典型といえよう。「アイヌ音楽の残るコタンめぐり」36巻7号[1962]:130で彼は、アイヌ音楽収集の成果があがったのは「民族芸術の遺産が、本当に大事なものであるという理解に達したためでもあり、アイヌ研究も、これまでの物めずらしい異風なものとしてではなく、正しい文化研究に立ったからでもあろう」と述べている。裏を返せば、「観光」にせよ「研究」にせよ、「物めずらし」さを求める視線が「私達はそんな見せ物ではない」という反応を引き起こしてきたことになる。この点については「アイヌ」を「戯画的に報道した者が罪を負わなければなるまい。然し実際に鞭を打たれるのは私達だつ（ママ）た」と無念さを隠さない。

研究の正当化＝「見せ物」の否定＝観光批判は、「高貴な野蛮人」のホンモノ視と観光にともなう現象(変容)のニセモノ視と平行である。彼は「あまりに清らかにであるが故に、にごった社会生活について行けない、それを世間では、簡単に滅び行く民族などという、歌い文句で片付けている」と「滅亡」言説を批判しながらも、「木で熊の形を刻むということは、すでにアイヌではなく、立派な日本人的根性である。…もう阿寒にはアイヌはいない」（「ふるさと阿寒の五十年」34巻10号[1960]:43-44）とアイヌの存在を過去化し、実質的な同化＝滅亡を宣している。

さらにもう一点更科の言説の特徴としてあげておきたいのが、ある種の道徳性・啓蒙的態度ともいえるような要素である。同じく「ふるさと阿寒の五十年」で彼は、「コタンの人々に真実の愛情を！」という小見出しの中で、「劣等感とうらはらの優越感をもって、コタンを見ていたまちがいを、恥かしく思わせられたことだった」（44頁）とし、反省とともに採集狩猟民の生活文化を文化相対主義的に評価する。

このような更科の道徳性・反省的態度と共通するのが、39巻7号[1965]:78-79の三浦綾子「アイヌの娘さんの本当の気持」である。ここで彼女は「どうかアイヌ民族と、和人との歴史を思い起して、詫びる思いで、彼女たちに対してほしい」と訴えかける。観光客が単に見物相手としてまなざすにすぎず、「彼女たちの心の奥にまで旅をして頂くのなければ、やりきれない思いがする」からである。そして「何の罪もない彼女たちに、この悲しみを抱かせたのは、われわれ和人の、何の理由もない蔑視と、好奇的な視線なのだ。偉くもない人間が、一段上に立って人を見るという、われわれの低い教養の故なのだ」と自己批判する（ここには彼女のクリスチャンとしての贖罪意識の現われのようなものを感じ取ることもできるが）。ただし、「アイヌの娘さんの本当の気持」とし

ては「『よい和人と結婚し和人に似た子を生（ママ）みたい』というねがいが、悲しいまでに住みついていることを、私は知ってほしいのである」と述べているように、主体的というよりは受動的でカワイソウというイメージが強く浮き出ていることは否めない。

更科や三浦とはまったく異なるタイプの著名人の見解が『挽歌』の作者・原田康子のものである。彼女は、「阿寒・釧路を訪れる若い女性への手紙」33巻7号[1959]:32-35の中で「アイヌに夢を抱きすぎないように」と忠告し、「あなたがもし、アイヌ民族に興味をお持ちでしたら、釧路や網走の博物館に行くほうが、ためになるでしょうし、ロマンティックな伝説の世界にあそぶこともできるでしょう」と勧めている。『挽歌』の作風と同様「ロマンティック」を重視する作家としては、旅行者（「若い女性」）が実際のアイヌの姿を見て“幻滅”するよりは素通りした方がよい、とあっさり片付けている。これら北海道在住の代表的“識者”の見解が意味することについては、以下であらためて検討する。

#### 3.3.2.4.2 混乱と矛盾

前述のように、三浦の文章が掲載されたのには編集部意向が強く働いている。その限りにおいては、編集部の方針は「見せ物」的な観光を排し“まじめな”「愛情」をもって「気持」を理解するようなものであると受け取れる一面がある。しかし編集部が“心ある”と目した執筆者に原稿を依頼しているにもかかわらず、「アイヌ」に関する記事はある種教訓的・道徳的な戒めとステレオタイプな表現が混在したものになっているといえる。それを特集号で見てみよう。

これも前述のとおり、原田康子は「阿寒・釧路を訪れる若い女性への手紙」33巻7号[1959]の中で「アイヌに夢を抱きすぎないように」、「あなたがもし、アイヌ民族に興味をお持ちでしたら、釧路や網走の博物館に行くほうが、ためになるでしょうし、ロマンティックな伝説の世界にあそぶこともできるでしょう」と書いている。一方で同じ号の「ぜひ見たい観光地 泊まりたい温泉」では「今まではアイヌしか売物に出来なかった感のある北海道だったが…旅行者でもアイヌと内地人の混血した女性に逢えば、その容貌のエキゾチックな魅力には、心ひかれるにちがいない」（113頁）と編集サイドが記している。また更科が「アイヌ音楽の残るコタンめぐり」36巻7号[1962]で「見せ物」を批判した同じ号に、「アイヌと生活したアメリカ人女性に聞く」と題するインタビューが掲載されている。この記事は当のアメリカ人女性の日本語の拙さも加わっ

て何がしたいのかわからないような代物だが、アイヌの家に泊まった彼女に聞き手の彫刻家・本郷新は「よく泊まりましたね。きたないでしょう」といい、彼女も「やはり生活低いから、ちょっときたないでした」と応じている（42頁）。「生活」体験が「アイヌ」＝「貧困」「汚い」のイメージを上書きしている。また39巻7号[1965]の三浦綾子「アイヌの娘さんの本当の気持」が掲載された同じ号での阿寒・川湯の紹介は、「内地の他の観光地と大差なくな」つた中で「あえて阿寒を感じさせるものといえば、軒先で熊を彫っているアイヌの姿だろう」（133頁）とステレオタイプを呼び起こしている。

さらに、更科源蔵が「木で熊の形を作るということは、すでにアイヌではなく、立派な日本人的根性である。…もう阿寒にはアイヌはいない」（「ふるさと阿寒の五十年」34巻10号[1960]）と書いたことも前述したとおりだが、それとは矛盾するような内容もある。39巻7号[1965]「アイヌの木彫」と題した紹介記事は、「観光地のみやげ品店で、原始林に囲まれた湖水のように澄んだ眼をしたアイヌが、じっと木片をにらんで座っている。…彼らは黙々と彫刻刀を使い出す。物さしも当てず、下絵も描かない。神の使いとし、長い間自然を分かち合っていたクマを彫るのにそんなものは要らないのだ」（112頁）と書いている。この号は三浦の「アイヌの娘さんの本当の気持」が掲載された号でもある。

そして、ある種観光の根源的矛盾を感じさせるのは次のような記事であろう。藤島泰輔「十勝平野への新しい動脈」41巻7号[1967]は、「日高アイヌは、沙流川の流域荷負、二風谷などの部落に約200人ほど住んでいる。ここのアイヌは固有の伝統文化を純粋に保って観光客の訪問を喜ばない」というキャプションを付した子どもたちの写真を掲載している（グラビア）。「観光客の訪問を喜ばない」と書きながら観光用の雑誌に紹介しているという言動ほど自己矛盾したものはないだろう。「観光のまなざし」論でいえば、非観光の領域にある人たちを観光の領域に引きずり込むような行為である。ところが、というかそれなのにとすべきか、本来自己矛盾として書き手が引き受けるべき弊害は実際にはそうはならず、見られる側が引き受けさせられてしまう。すなわち、このような記事を見た観光客が二風谷を訪れる結果を招いたとして、その影響を被るのは見られるアイヌの側なのである。

戦前期の高圧的な視点に比べると、戦後の記事にはより啓蒙的と取れる部分もあるが、通底しているのは、「アイヌ」という要素が北海道の観光表象から排除できないため、「見せ物」視するような態度を戒めるかた

わらで観光スポットとして紹介する点である。その際にはステレオタイプな従来の認識も紛れ込んでいる。また見るに値するホンモノのアイヌ像を作り上げているという点でも戦前と同様である。このような限界は「観光」の限界とにいえるかもしれない。39巻7号[1965]号69頁には、従来の「商魂」に対する批判を受けて白老<sup>18</sup>の「部落」が移転することが紹介されているが、それは基本的には「旅行者のイメージをこわさないための対策」であって、観先客の視線を問い返すようなものではないのである<sup>19</sup>。

「今年の北海道旅行の焦点」39巻7号[1965]では、『挽歌』による若い旅行者の動員は、武田泰淳作の『森と湖の祭(ママ)り』によって、ひきつがれ、この時期から、北海道のアイヌや生活面が再認識され、旅行者の興味は、単なる異国的風景の礼賛から一步すすみ、一般的な観光コースにあきたらない旅行者を生み出した(67頁)とされている。では「再認識」の中身とは何なのか。「アイヌ」が再浮上し、それにとまって編集部の方でも配慮しているさまはうかがえるものの、上述のように「アイヌ」表象枠組みには通底したものがあり、それを根本的に見直すような「再認識」ではなかったことは明らかである。

この時期、アイヌ自身が寄稿している文章はわずかに一例、砂沢ビッキ「アイヌ部落のお正月」31巻1号[1957]:96-97のみである。この中で彼は次のように書いている。「近頃、アイヌの行事が、無形文化財として、内地で、熊祭りや、アイヌ舞踊と称して、九州の端までいって公開されているが、それは過去の行事であって、現在のアイヌ生活の中にはないものであり、現在、時々行われる熊祭りは、本質的なものではなく、興業的かあるいは、記録をするためのものしか、行われないのである。それらの行事を見た内地人の中には、今なお、アイヌがそのような原始的な生活をしていると誤解している人々が、案外多いので、私としてははなはだ遺憾である」。ところがその3ヵ月後の31巻4号には読者写真コンテスト(コンクール)の入賞作品として、「熊まつり」というタイトルの写真が「万余の観衆が集まった」様子とともに掲載されている。入賞作品であれば勝手に排除するわけにはいかないかもしれないが、砂沢から見れば「誤解」を招く「遺憾」な掲載であろう。アイヌ自身の主張は数も少なかつたせいもあるだろうが、混乱や矛盾に満ちた紙面を改善する影響力をこの時代には持ちえなかつたのである。また、編集側も矛盾や混乱が生じないよう隅々まで統制していたわけではなかつた。

### 3.3.2.4.3 まなざしを引き受ける／引き受けない

ただ、上述の点を「観光の限界」と片付けてしまうだけではなく、本稿のキーワードである「まなざし」のあり方についてももう少し掘り下げてみたい。

更科の記述は「観光のまなざし」に基づくものか。答えはイエスである。更科は「観光アイヌ」のあり方を本物ではないと批判しているので、一見観光を否定しているようにも読める。しかしニセモノ批判のあげくに彼が書いたのは「純粹アイヌ訪問記」(33巻7号[1958])であり、よりホンモノらしさを求める観光者の行動と一致する。実際数は多くないにせよ、一部の観光者がホンモノを求めて著名な観光地以外の場所を訪れたことも事実である。つまり、更科の一文はそのような観光者の行動を呼び覚ます性格のものになっているといえるだろう。

では、更科の記述はポエティックかポリティックか。初期のノスタルジックに故人を回想する文章はポエティック(趣味がよくないという人もいるであろう)といえるだろう。その後、「阿寒にはアイヌはいない」と断言するに至っては、ポリティックな性格が強くなったと評価できる(ポエティックな要素がまったくなくなるといえないが)。だれがホンモノ／ニセモノかを判別する(他人が勝手に!)権利があるのかは政治的なものであり、ホンモノを求めてどこを訪れるべきかという言明も同様である。

次に、原田康子の一文は「観光のまなざし」によるものなのだろうか。実際のアイヌを見ると幻滅するだろうからパスした方がよいと説くのは、「遠い場所」は、離れている分だけ、夢や憧憬の対象として美化されやすい(滝波 2005: 12)のをぶち壊すような作用を持っているといえる。しかし、原田は旅先に夢や憧憬を抱くこと自体を否定しているわけではなく、それが裏切られないよう予防線を張り、「アイヌ」を対象からはずした方がよいといっているのである。その意味では、原田の記述も「観光のまなざし」の構図である。そして何を見るべき／見ないべきかを指示している点では、更科同様ポリティックな性格を持つ。ポエティックな作用を守るためにポリティックな作用を発揮している文章といってもよいかもしれない。

そして、三浦綾子の一文は「観光のまなざし」の産物なのだろうか。ノーのように思えるが、イエスなのかもしれない。「わびるような気持で接する」というのは、普通に解釈すれば観光の対象として一方的なまなざしを注ぐのとは異なった態度を求めているので、「観光のまなざし」で

はない。しかし、そうはいつでも、「わびるような気持」を持ってとはいえず、わざわざ観光地までアイヌを求めて行くのであれば、結局のところ観光からは脱却できていないといえるのかもしれない。ただ、三浦の一文に関しては、イエスかノーかを判定することよりは、これを読んだ場合読者にどのように作用するかの方が重要と思われる。どのような態度で接するかを説いている点では、明らかにポリテックであろう。私が当時の読者だったとして、三浦の文を額面どおりに受け取った際、アイヌに「わびるような気持」で会いに行くかといえ、腰が引けてしまうような気がする。「同じ女性」ではないし、また、わざわざ後ろめたい気持ちを抱えて浮かない旅をするよりは、原田の勧めるように割り切って楽しんだ方がよいかも、そう考えるのが一つの方向である。つまり、三浦の一文は読者を旅に誘う性格のものとはいえないと思う。あるいは、行きたいけど良心に照らせば行くべきではないというような、ダブルバインド状態に潜在的観光者を置くものではないだろうか。

それにしても、なぜこの時期に三浦のような性格の一文が紙面に登場したのであるだろうか？ 深読みというか強引に結び付けすぎかもしれないが、その前年に「紀行文学賞候補作品」として掲載された読者の投稿を参照してみたい。山本鉦太郎「北見枝幸への旅」38巻11号[1964]:166-169である。題名のとおり枝幸を訪れた横浜在住の著者は、地元民の案内で居酒屋で談笑していると、店に魚介類を売りに来たアイヌを見た。町近くのアイヌは漁業で細々と生計を立てているらしい。「中央からもそっぽをむかれ、同じ土地の人々からも隔離されたアイヌの悲惨な境遇を、一旅人の感傷からではなしに、なんとかして欲しい、いや、なんとかせねばならぬ社会問題として考え、私はすっかりしめっぽくなってしまったのだった」と山本は心情を述べている。このエッセイは通常の観光地ではない場所でアイヌに遭遇し(「観光用ではないアイヌに私が逢ったのは、この時が二度目」と著者は書いている)、彼らの置かれた境遇に目を配っている点で、ありきたりの見聞ではない、“ディープな旅”を感じさせる。また、「社会問題」として意識する山本は複雑な思いも抱えながら、“ディープな旅”にそれなりに満足しているのではないかとも思われる。その翌年に三浦の文章が登場するということは、山本のように問題意識を持った読者にとっては、「社会問題として考え」た場合の心構えを説いているものとして読まれるだろう。編集部が山本の一文を強く意識して三浦の一文を用意したのかどうかはわからないものの、少なくとも山本のような人物が「一般的な観光コースにあきたらない旅行者」

にあたることはたしかだろう。いずれにせよ、特集の「より深く見よ」というメッセージの一部として三浦の一文が現れたことを再度確認しておこう。それに呼応するかのようには、同特集号（39巻7号）には「アイヌの現状 彼等をナマケモノにしたのは内地人の罪だ！」という解説もある。

もっとも、三浦のような一文がその後紙面に登場することはなかった。似たような記事が連続すれば、読者を旅に誘うには逆機能として作用するであろう。前述の藤島泰輔の記事（写真キャプション）で述べたように、観光を嫌うという人々を観光雑誌に紹介することが矛盾の最たるものとしても、実際にそれを引き受けさせられるのは見られる側である。書く側でも見る側でもない。しかしながら、三浦の一文は、たとえ他者の代弁という問題とパターンリズムという問題点をはらむとしても、問題を観光者自身に引き受けさせようとする呼びかけであり、「まなざし」の自覚である。それは“お気軽な”観光者にはあまりに荷が重い問題である（山本のような例外的存在もあるが）。

42巻9号[1968]の特集号には、鈴木佐代子「近文アイヌ層雲峡に踊る」と題した記事が掲載されている（130-137頁）。これは若い女性の踊り子たちに焦点を当てている内容だが、現代風の生活を送っている様子が説明された後で、わざわざ「アイヌ人ほど、文明を拒否した民族はいないと言われる。その結果滅亡に向ったわけだが」と旧来の滅亡言説をくりかえす。眼前で生き生きとした表情を見せる相手をどうして「滅亡」と表現できるのか、書き手は考えたことがないのだろう。三浦のように読者に重荷の負担を求めるかけらもない。あるいは、鈴木ほどくわしく書いたものではないが、加藤秀俊「原野と湿原・北海道の遠近」40巻10号[1966]は、「強者のまえに弱者がたどる道というのは、しょせん、こういうものなのであるか」（158頁）とあっさり片付けている。三浦もアイヌを弱者扱いしているという点では共通するものの、加藤には三浦が抱いていた良心の呵責といったものはまったくない。「深入り」しない方が楽なのである。

#### 3.3.2.4.4 変化の予感？

1970年7月特集号「にわかには盛り上がるアイヌをめぐる動き」は、『旅』の中でこれほどポリティックな性格の文章も珍しいといってもよいものである。道議会で「アイヌ問題」が取り上げられ、アイヌ関係の出版物や文化保存の活動がさかんになってきているといった動向が紹介され、

「たしかにアイヌをめぐって何かが変わってきているのだ」(117頁)と締めくくられている。後年民族復権運動とか解放運動と総称されることになる動きの一端を感じ取ったものであることはたしかである。

そして1974年6月特集号には、アイヌ自身が寄稿した一文として、萱野茂「わがウエペケレ！ 滅びゆくアイヌのこころ」が掲載されることになる。前述のように、1970年までの期間でアイヌ自身が書いたものはずかにかに一例であった。三浦が「アイヌの娘さんの本当の気持」について書いたとしても、それは基本的に代弁であり、『旅』の中にもアイヌ自身の声が直接出てくることはなかった(サバルタンは語るができない)のである。その意味では、萱野茂の登場も一つの転換点と見なせるかもしれない(まだ「滅びゆく」という前の時代の形容詞を引きずってはいるが)。

しかしながら、私見では、1970年代以降、『旅』の紙面はアイヌ関係の記事を減少させ、むしろ言及しなくなっていく。それ以前の、矛盾もあり問題含みの文章も数々ありながら、同時代の社会意識を読み解く手がかりをそれなりに提供していた紙面が、ポリティックな作用を消去し、ポエティックな作用にのみ走るようになる。いわば無難な紙面構成になっていくのである。1970年の「にわかには盛り上がるアイヌをめぐり動き」は、現実の政治的な動向を素直に反映したものであるが、その後はそのような政治的な内容を維持していくことはできなくなったのであろう。アイヌ関係の記事が少なくなった後には、紙面からは「まなざし」に関する手がかりも失われていくことになる。

#### 4. おわりに――「深く見る」ことの意味とポエティック路線への退行

『旅』の紙面における「観光のまなざし」は、編集権として機能し内容を方向付けている。ただし個々の記事内容の細部にまで目配りされているとはいえず、混乱・矛盾した情報を含んだ、いわば“ゆるい縛り”にとどまるものである。1959年の特集号から1965年の特集号に見られるように、当該期のあいだに紙面上で生じた「観光のまなざし」の変化は、「より深く見よ」というメッセージであると総称できる。「より深く見る」ことは、北海道観光全体では、「地の果て」への着目であり、人々の生活や食をも楽しみ体感的に北海道を旅行することであった。これは1965年が急激な転換点であるというより、それ以前からの紙面の傾向を総括した上で、読者に提示したものといえるだろう。「地の果て」という用語に集約される「辺境」への関心の高まりは、ポエティックに見えな

がらポリティックな作用を隠し持つものであるが、それが執筆者や読者に意識されることはほとんどなかったであろう。

一方、「アイヌ」については、「より深く見る」ことが「気持」に寄り添うこととして三浦から新たに提唱されたが、新たな傾向として定着することはなかった。三浦の一文が読者を旅に誘うものではない側面を持っている以上、そのような「まなざし」の転換は受け入れがたいからである。そしてまた、通常であれば矛盾や難問は観光対象の見られる側に押し付けられる構造になっているのに対し、三浦の一文は読者にそれを引き受けるよう求めるものであったせいもあるだろう。

「深入り」を求めたり自ら志向したりするような人間が望ましい当事者であり、弱者扱いする言葉をあっさり投げかけて通り過ぎる浅い観光者が望ましくない当事者（あるいは非当事者）であるとだけいうつもりは私にはない。ただ、「まなざし」の変化が相手を支配するための道具としてではなく、自らの態度や構えに反省的变化を求めるものであるとすれば、おそらくそう簡単には受け入れられない。三浦の一文が『旅』全体の「アイヌ」関連記事の中では浮いているように見えるのは、そうした理由によるものだろう。また、1970年代以降は、だれがアイヌの声を代弁できるのか、という問題も意識化されるようになるだろう。当事者に語ってもらう方がよいのではないかということだ。ただ、萱野茂の登場（1974年）に見られるような当事者自身の語り定着するというよりは、『旅』の紙面構成全体の傾向は、ポリティックな方向へ向うのを回避し、ポエティックな内容をむしろ志向するようになった。

『旅』が持っていた啓蒙的な傾向は、時代によって性格を変えながらも、総体的には保たれていたように思われる。紙面全体として追求した“正しい観光のあり方”は、比較的平和な時期に無難な題材を扱えば、破綻なく執筆者と読者の平和な共同体をそれなりに醸成することに成功したように見える。ただ、「不穏な動き」や読者（執筆者）の不穏な感情を掻き立てるような内容を扱った場合、その共同体が継続されるかどうか保証の限りではない。1960年代後半になって紙面に現れたアイヌ民族関係記事のいくつかには、それまでの『旅』の姿勢では処理できない局面を迎えそうな予感が垣間見えると、後知恵ではいえなくもない。1970年代という新たな時代に入ると、アイヌ関係記事はむしろ無難な方に流れ、政治的動向をはらんだ物騒な展開を回避するようになる。それは“正しい観光”を追求しながらも“正しい民族間関係のあり方”には踏み込めなかった観光雑誌の限界ではある。踏み込んで政治的主張を含んだ記

事を掲載し続けたりすれば、読者に敬遠されることを編集部は感じていたかおそれていたであろう。『旅』における「観光のまなざし」の変化は、読者が「自家中毒」を起こしたり観光行動そのものを差し控えたりするようになるまでには至らず、手前で引き返し、「安全地帯」にとどまったのであった。ポリティックな内容を含み持つ記述であっても、観光雑誌はあくまでもポエティックと受け取られる内容を提供し消費される必要があったからである。ポエティックな記述とポリティックな記述が対立し、後者が前者をかき消すような事態は、観光雑誌の限界を越えており、破綻する前に安全路線へと舵を切る必要があったということである。

ポエティックとポリティックを対比的に言えば、『旅』におけるポエティックな記述は表面的で、ポリティックな記述は深さを求める傾向がある。ポエティックで深い記述はありえないことはないのだが、観光雑誌においては両立しえなかった。そして深さを求めるポリティックな記述は、それが北海道一般の表象や「道民」の生活にとどまっているかぎりには旅行者や読者をまだ安全圏においておくが、ひとたびそれが「アイヌ」の、しかも政治に関わる領域に踏み込むとなると、紙面を維持できなくなったのである。

以上の点を、テレビドキュメンタリーにおけるアイヌ表象を検証した崔の言葉を援用していえば、『旅』で登場する「アイヌ」も「救済すべき他者」（崔 2017: 135）の範疇に収まるものである。特に、私が読者の不安な感情をかき立てるものとして引用した三浦綾子の文章中の「アイヌ」は、まさに「救済」の対象そのものである。崔の研究によると、テレビドキュメンタリーでは1980年代以降「主体化する「他者」」像が現れるが、『旅』の紙面においては政治的な主体としての「アイヌ」が登場する機会は失われた。1960年代後半の一時期、政治的な動きがまだ表面化しない時代には、商業誌においてもポリティックな記事が掲載される余地はあったものの、その後の時代の政治的な動きを『旅』は遮断した。その点では、『旅』におけるアイヌ表象は1970年代でその社会的役目を終えたのである。

また、このことは同時に、「観光のまなざし」の枠組みの変容を意味している。それまで『旅』の紙面は専門家の啓蒙的視点による編集がなされていたが、そこには読者も参加して協働で「まなざし」を作り上げる余地が残されていた。しかし、ポリティックな内容を忌避しポエティック路線へと転換した後では、編集部はもちろんポリティックな記事を執筆依頼しないし、仮に読者がポリティックな内容を投稿したとしても、

検閲されて紙面には載らなくなるという帰結をもたらす。通常、このような雑誌は時代が下るにつれて読者の参加度が高まっていくと思われるかもしれないが、『旅』に関してはそのかぎりではない。「観光のまなざし」は直線的ではなく、揺れ戻しを含んだ変容の過程をたどることもあるのである。

## 付記

引用に際してはルビは省略し、漢字やかなは一部引用しやすいように変えてある。

なお、『旅』の閲覧に関しては、日本大学総合学術情報センターの高井智章氏に便宜をはかっていただいた。記して感謝申し上げます。また、『旅』の紙面への着目を促した修士論文を送ってくださった佐々木陽平氏にも一言お礼を述べたい。草稿にコメントいただいた手島武雅氏にも感謝する。

## 注

<sup>1</sup> 別稿で論じた社会学者関清秀が次のように書いていたのが私にとっては興味深かった。「旅をする社会学にたずさわったばかりに味わった余分の苦労も小さくはなかったが、考えてみれば人生そのものが旅であり、だれでもがそれぞれに侵してはならぬきびしい真剣な旅を続けているのが真実の姿である。その旅にふくまれる意味をくみとることは、ひとり社会学者に限らずすべての人に与えられた課題ではなかろうか」(『北海道新聞』1959.8.13「旅と社会学」)。

<sup>2</sup> アーリはその後『観光のまなざし』を改訂し第3版が出版されているが、フーコーを援用している箇所では論旨が変えられた点はない。

<sup>3</sup> 本稿ではこれ以上展開できないが、「観光のまなざし」の普遍的適用を考えるよりも、複数の主体(通常の観光者も専門家も)の複数の「観光のまなざし」があってもよい(その中には、安村のサステイナブル・ツーリズムにおける「専門知のまなざし」を含めてもよい)と私は考える。何よりアーリ自身が「これが観光のまなざしだというようなものがあるわけではない。社会によっても集団によっても時代によっても多様なものである」“There is no single tourist gaze as such. It varies by society, by social group and by historical period”(Urry 1990:1)と述べている。そう考えると、アーリ自身も認めているように、「観光のまなざし」はフーコーの医学論のまなざしとはやはり「次元が異なる」点もある。

複数の「観光のまなざし」があってもよいと私が考える一つの理由は、私のようにエスニック・ツーリズムに特に関心がある論者とそうでない論者では、論の立て方が異なるように思われるからである。異民族間の接触という主題では、エキゾチシズム、オリエンタリズム、コロニアリズムなどといった概念がただちに思い浮かべられるし、観光以外の分野で積み重ねられてきた研究蓄積に学んだ上で、「観光のまなざし」への接合(「観光のまなざし」の中に組み込んでもよいかもしれないが、そうでなくてもよいだろう)をはかる必要がある。「観光のまなざし」一般論では必ずしも支配/被支配という構造を想定していないだろうが、エスニック・ツーリズムについてはそうはいかない。

<sup>4</sup> もっとも、ここには「マジョリティ」に対しては、というただし書きをつけるのが適当であろう。「マイノリティ」に対しては、生活全般を監視するまなざしとして作用する。

<sup>5</sup> ただ、「生の側から死を見る」のは、生と死の境目を峻別するのが困難な問題をどうするかといった論点をも時に引き起こすだろう。このことは、「観光のまなざし」でいうと、観光と非観光の線引きは可能かというアナロジーになる。

<sup>6</sup> 滝波は地理学者らしく、「ジオ・ポリティック」「ジオ・ポエティック」という

用語へと展開していくのだが、私には基点となる概念の方が使いやすい。

<sup>7</sup> 編集長の岡田は、40巻11号[1966]の座談会で「この雑誌の読者は大体、東京・大阪及びその衛星都市に住む人が八〇%近くを占めています」(98頁)と述べている。

<sup>8</sup> 戦前期で1冊丸ごとの特集が組まれるのは「外地」植民地である(森2010:73-4)。

<sup>9</sup> 「東都の文化は、東北地方を素通りして北海道へ至る」というような東北への対抗意識は、当時の文献あるいは同時代に教育された人の回顧としてしばしば登場する文言である。それについて「妙な誇りを感じた」と回想している北海道出身の作家もいる(船山馨「石狩平野の百年」42巻9号[1969]:117)。また、おそらくは東北の側でも北海道を意識していた側面がある。一例であるが、東北における近代の地域思想を研究している河西英通によれば、1890年代「青森県を以て北海道の奥又奥と誤想」するような東京以西の認識を慨嘆する一方で、発展していく函館に取り残されないような対抗策を講じなければならない、というような意識が存在していたことを紹介している(河西1996:第4章)。もちろん青森県で東北全体を代表させることはできないし、時期による意識の変容をも押さえる必要はあるが、各地域が他地域をどう認識していたのかというのは、ここでは掘り下げることにはできないにしても、興味深いテーマではある。

<sup>10</sup> 「想像の北海道」/「実際の北海道」というような対比のさせ方は他の北海道案内書にも登場する(早坂1926:1)。ある種の間テクスト性が作用していると推定することはできよう。

<sup>11</sup> 1927年に東京日日新聞・大阪毎日新聞が主催し読者の人気投票によって選定された「新日本八景」の基調は、白幡によれば「理科系の風景論」である(白幡1992:302)。

<sup>12</sup> 宮原晃一郎は幼少のころ北海道に移住、バチエラーに英語を習い、小樽新聞記者として働いていたこともある。この記事の執筆当時は主に北欧文学の翻訳者として活躍していた。小熊秀雄は小樽生まれ、旭川新聞社に記者として2度にわたって在籍、その後詩作活動に傾注、記事執筆当時は東京往々、「アイヌ」に関係した作品として長編叙事詩「飛ぶ橇」がある(日本近代文学館・小田切進編『日本近代文学大事典』講談社、1977年、参照)。この点については佐々木(1997)に教示を得た。「飛ぶ橇」がアイヌ民族を登場させた詩として高い評価を一般的に受けていることを知っている読者からすれば、この一文を書いたのが小熊本かかどうか疑問を抱かせるような内容かもしれない(編集部がかなり手を入れたか、代筆させた可能性など)。ただ、ここでは、編集部が小熊の名を使ってこのような記事を紙面に登場させたことが重要であると述べておきたい。

<sup>13</sup> もっとも、戦前期においてもこのような配慮がなされていなかったわけではない。15巻6号[1938]の編集後記には、「今月の北海道特集編は…必ずや北海道旅行者によき資料を提供するものと考え」(126頁)という編集サイドの自負が現れている。ただ戦後の北海道特集号のように、編集サイドの意図が明確に示されている箇所が戦前にはそれほど多くはないというだけのことである。

<sup>14</sup> 唐突な引用と思われるかもしれないが、宮本常一の次のような一文も私の認識と符合する。「北海道稚内は樺太が日本の領土であったときは繁栄した町であり、さらにその北に国土のあることを思わせた。しかし今はさいはての町になっている」(宮本1967:60)。

<sup>15</sup> ただし留意しておきたいのは、ここであげた二人は道内出身・在住経験者ではあるが、執筆時には道外に在住していることである。つまり、外に出ることによって北海道という土地を「客観」視している面と同時に美化している面があるのではないかと私は推測している。道内在住者が同様な認識を抱くようになるのはいつなのかは、『旅』の紙面からだけではうかがえない。

<sup>16</sup> 開拓に関して懐疑的・批判的な記事をあげるとすれば、小松左京「開拓生活の現実と希望」42巻9号[1968]がある。「まことにあの広大な、未開の自然、熊と原野と、原生林と害虫の北海道がたった百年で、よくこれまでひらかれ、人間臭くさくなってしまうものだ。/しかし—おお、山の神よ、古き火の神よ、卿らを追いたてた、その最初の一步において、われわれシャモはある種の誤りをおかし、それがあとあとまで尾をひいているのではないだろうか? あの心ひろやかな、魂美わしきアイヌの人々を、今日のみじめに追いこみはじめた時、内地人は、この土地の先住者たちより、「土地の魂」をのりうつしてもらうことに失敗し、そのため長らくこの土地を本当は心から「わが土地」とすることができなかつたのではあるまいか?」と小松は書く(154頁)。ただ、この一文は「開道百年」を記念したお祭り騒ぎ的な雰囲気にも水を差す、というトーンの文明批評的な性格が強く、小松が一過性ではない問題としてどれだけ真剣に受け止めていた

かは不明である。

<sup>17</sup> これは戦後本州以南のデパート等で催される北海道物産展の動きとも呼応するだろう（谷本 2009）。

<sup>18</sup> ただ、更科が阿寒について書いているような、白老についてくわしく言及した記事は紙面には登場しない。「俗化」が敬遠されたか、阿寒に通じている更科のような書き手が、白老に関しては見当たらなかったせいかもしれない。

<sup>19</sup> とはいえ、「観光」と非「観光」領域の境界が不明な点もやはり存在する。『旅』の紙面でもアイヌが「滅びゆく」もしくは「同化」していくものであるという認識自体に疑いを入れるような視点や文言は登場しない。しかし、観光対象としてのイメージは「同化」する必要はない。それどころか、「同化」されてしまふとかえって不都合なのである。したがって「見せ物」化を批判しつつ差異化された観光対象が必要とされ続けるのであり、発想としては「文化保存」とかぎりにくく接近したもになる。またもう一点「観光」と非「観光」の区分をあいまいにするのは、見られる側のリアリティである。更科の「アイヌ音楽の残るユタンめぐり」36巻7号[1962]からもうかがえるように、見られる側からすれば「研究」も「観光」(=「見せ物」)も同じように見える可能性があることは否定できない。更科の場合は説得に「成功」して調査を遂行できたようであるが、失敗することも十分ありえたのである。

## 文献

岡田喜秋，1960，『日本の秘境』東京創元社

河西英通，1996，『近代日本の地域思想』窓社

佐々木陽平，1997，「近代日本における「アイヌ」認識の研究——首都圏>空間における<観光アイヌ>イメージ形成を中心として」上越教育大学大学院学校教育研究科96年度修士論文

白幡洋三郎，1992，「日本八景の誕生」古川彰・大西行雄編『環境イメージ論——人間環境の重層的風景』弘文堂，277-307

———，1996，『旅行ノススメ——昭和が生んだ庶民の「新文化」』中央公論社

周藤真也，2018，「ツーリストとは誰か？——「観光のまなざし」論の展開に向けて」『早稲田社会科学総合研究』18(1)，1-10

滝波章弘，2005，『遠い風景——ツーリズムの視線』京都大学学術出版会

谷本奈穂，2009，「おいしい「地方」体験——北海道物産展を事例に」福岡良明・難波功士・谷本奈穂編著『博覧の世紀——消費／ナショナルアイディア／メディア』梓出版，100-128

崔銀姫，2017，『表象の政治学——テレビドキュメンタリーにおける「アイヌ」へのまなざし』明石書店

戸塚文子，1952，『日本の旅』要書房

———，1953，『続・日本の旅』要書房

日本交通公社，1962，『日本交通公社50年史』

早坂義雄，1926，『自然と人文趣味の北海道』北光社

東村岳史，2006，『戦後期アイヌ民族——和人関係史序説——1940年代後半から1960年代後半まで』三元社

檜垣立哉，2010，『フーコー講義』河出書房新社  
宮本常一，1967，『宮本常一著作集 2 日本の中央と地方』未来社  
森正人，2010，『昭和旅行史——雑誌『旅』を読む』中央公論新社  
安村克己，2004，「観光の理論的探求をめぐる観光まなざし論の意義と限界」遠藤英樹・堀野正人編著『「観光のまなざし」の転回——越境する観光学』春風社，8-24  
山田秀三，1982，『アイヌ語地名の研究 1』草風館

Kaplan, Caren, 1996, *Question of Travel: Postmodern Discourses of Displacement*, Durham: Duke University Press (= 2003, 村山淳彦訳『移動の時代——旅からディアスポラへ』未来社)

Urry, John, 1990, *The Tourist Gaze: Leisure and Travel in Contemporary Societies*, London: Sage Publications (= 1995, 加太宏邦訳『観光のまなざし——現代社会におけるレジャーと旅行』法政大学出版社)

#### 資料

『旅』1巻1号(1924年) — 48巻12号(1974年) 日本旅行文化協会(1924年～1933年) → ジャパン・ツーリスト・ビューロー(1934年～1974年)